

武蔵野日曜聖書講筵（特別講筵）

大人物 西郷隆盛

——マタイ伝第5章43～48節、ヨハネ一第4章7～13節——

1992年11月29日

小池辰雄

大人物 西郷隆盛 キリストという超大人物

【マタイ】

「43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等きけり。44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、収税人も然するにあらずや。47 兄弟にのみ挨拶するとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。48 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」（マタイ5・43～48）

【ヨハネ一】

「7 愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、神より生まれ、神を知るなり。8 愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。9 神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うによる。10 愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥めの供物となし給いし是なり。11 愛する者よ、斯のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがいに相愛すべし。12 未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。13 神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。」（ヨハネ一4・7～13）

●大人物 西郷隆盛

今日は、特別講筵ということ、「大人物」という題です。ということとは、あまりに日本の政界がなっていない姿であるので、私はこないだから憤激しているわけです。

それで、近代の日本の大人物。誰と思いますか。西郷隆盛です。西郷さんのことを、私は伝記をいろいろ読みまして、詩を書いた。その西郷さんの詩をこれから読みます。そう



いう特別な集会です。（後に『靈界の星々』1998年刊に掲載）

西郷隆盛

——大人物——

九州南端、薩摩大隅両半島の

抱く鹿児島湾の奥深き

桜島火山の噴煙を

おのがたましひの呼吸の如く

眺めて生くる大の雄の兒

彼は桜島西方鹿児島市加治屋町の

賤が屋の士の兒

氣宇は広大、外貌悠揚

一切を包摂する如き氣概あり

常人の端倪すべからざる存在である。

幼少の頃から聞かん坊で

寡黙にして体あたりの豪の者

また何ごともひき受ける太っ腹。

誰あらん、これこそ若き西郷さん！

喧嘩は滅法強かったが

右腕を斬られた災難のため

文の道に力を入れ始めた。

先ず福昌寺の無参和尚のもとで

禅の道にたましひをうち込んだ。

朴直にして聡敏、読書を好む。

読書多岐に互り且つ深く

事物の神髓をよく把握する。

而も彼の人格の中心は畏敬の念と

想い遣り深き愛であるので

彼の至言

「敬天愛人」

の言以前にその実存の人であった。

成人しては貧困者、弱者、農民を深く顧み

何ごとも無げに荷っていた。

彼が二十有六歳の時



嘉永五年長月に父が他界。
ついで霜月に母が身まかった。

遺児は四男三女であったが
長男たる隆盛は役人になり

鋭意日夜働いて弟姉を養い
更に亡父の借財を二十五年目には
返済し終り重荷をおろした。

領主島津斉彬は名君

西郷は衷心からの尊敬をもて彼に奉仕した。

人物島津公は、庭方役の身分は低き

このただならぬ男を見抜いていた。

安政元年四月、小石川なる水戸藩邸で

西郷は藤田東湖に始めて面接。

東湖は同行者樺山に向い

「六十余州士気の振わぬこと

今日の如きは未曾有」

と、宛然平成四年の日本の政界の如き

幕府を貶し、義人いずこに在りや

一国の正気は断滅に近しと断じた。

眼光炯々山伏か山賊の如き

東湖の慨嘆に、さすがの西郷も感服し

両者は肝胆照応するのであった。

西郷は藤田東湖先生といつて

敬意を表したが、東湖はまた

「貴殿の如きが斉彬公を戴いて

ことを計れば外敵何ぞ恐れん」

と、大いに鼓舞激励するのであった。

安政二年十月の大地震に際し

東湖が不運にも仆れたと聞き

西郷は男泣きに泣いた。

その後越前の藩士橋本左内が

天下の大勢を滔々と論じたので

西郷はこれにも敬服した。

然るに安政四年七月十五日に



主君齊彬の他界を知って
西郷は号泣した。

幾日も悲哀に沈んだ。

僧月照も悲しみの極みであった。

踵を返せば勤王派の身辺危き京都。

月照を駕籠の鳥の如くし

西郷はこれにつき添って

京都を去りゆくその相は

病者を運ぶが如き歩度。

密偵のたむろする茶店に

故意に立ち寄った。

巨大な西郷すら認め得ぬ

彼らの眼はふし穴か、西郷の豪胆の勝ち。

九月二四日二人は大阪を出帆。

月照はいずこかと追手はこなた、彼方へ。

船中で月照はこう詠じた

難波江のあしのさはりは繁くとも

なほ世のために身をつくしてん

六昼夜を経て馬関の港につき

西郷は月照と別の路を辿った。

月照もたくみに道を辿り薩摩についた。

司矢とる身にしあらねどひとすじに

立てし心の末はかはらじ

と月照。西郷は

「時来たれり、法華嶽寺にお伴せん」

月照と西郷は乗船、薩摩瀧は鏡面の如。

「満月中天に在り、いざ飲まん哉！」

夢か現か、船上の笛の妙音に聴き入る二人。

船は花倉の沖にさしかかった。

余人が眠気に襲われた隙を見て

二人は相抱いてどぶんと龍宮城へ！

その水音に驚いて平野、阪口、重助ら

思い思いの行動をとり、海面を見たが

二人を呑んだ海波はもとのまま。

西郷さん！ 月照和尚さん！
との絶叫も

船頭の漕ぎ回りも空しくあった。

すると突然、抱き合いの二つの軀むくろが！

急いで船に引きあげ、岸边に漕こぎつけ

最寄りの漁夫を呼び集め

焚火たきひで溺身おぼれみをあたためた。

月照は膚色はだ白く女体のようだが

既につめたく血の気なし。

西郷は息を吹き返し蘇そせい生した。

その懐中から月照の筆跡とおぼしき歌

曇りなき心の月も薩摩さつまがた潟

沖の波間にやがて入りぬる

大君おおきみのためにはなにか惜しからん

さつまの瀬戸に身は沈むとも

薩摩藩では西郷と月照が

海に投身して果てたと発表。

情の深い西郷は、おのれのみ生き還りしを

長らく苦悶したのみか、その心の痛み

生涯消え去ることはなかった。

月照の十七回忌

明治七年霜月十八日の句に

「相約あひやくして淵ふちに投あず後先無あしひきし

豈あにはか図らんや波上再生の縁

頭こしらへを廻めぐらせば十有余年の夢

空むなしく幽明ゆうめいを隔へて墓前むかひに哭なす」

かくて彼は泣き伏した。

悲歎は悲歎、西郷は悲しみを乗り越えて

相も易しらず孜々しし読書に沈潜した。

藩命により大島に流れた。

時に安政五年の暮。

三十二歳、変名して菊池源吾と名乗った。

島の人々はこの巨漢をはじめは恐れたが

情愛深き彼を頼もしき人と親しんだ。

代官の苛政に苦しむ島人のため
西郷は毅然と然るべく抗議した。

かくて流島生活空しからず。

島人佐宮志愛子が彼を慕い、

彼も孤独を慰められ、おのずから

愛情交い、同棲するうちに

男の子が与えられた。

その名は菊次郎、文久元年正月のこと。

翌年七月には長女菊子が生れた。

西郷は既に鹿児島に帰還。

しかし西郷は島庁の島民に対する苛政を視

例えば甘蔗砂糖製造のことにしても

その過酷な呵責に断乎抗議した。

弱者の味方をする、幾種、幾度なるか。

西郷は正に無名の天誅的な大裁判官。

嗚呼此の如き大人物

今の日本にあらまほし。

文久二年三月、九州各地を視察して

下ノ関で、久光公の如き「地ゴロ」に

何ができるかと

小松帯刀との激論中に放言したことが

愚物久光の耳に入り、激怒して

上京中の西郷を徳之島流しに処した。

八月の末つかた龍郷村から愛妾愛子が

菊次郎と菊子を伴って訪れた。

在番附役中原万次郎は令書を呈した。

それにより、彼は更に沖永良部島へ。

帯刀は奪われ、流罪人あつかいだ。

どんな運命になろうとも

そんなことで動ずる西郷か。

船中も牢屋同然、彼の心は大海同然。

島に着く

「今からは流罪人でござす」

「どっかこの馬にお乗りやったもんせ」

「もう二度と土をふむこともなからう、最後の土を踏ませてくいやったもんせ」

在番所の和泊村まで一里の道を

感無量で彼は歩き通した。

西郷の牢獄は二坪ほどの狹隘で。

壁も戸もなく、粗末な格子づくり。

風雨の吹き漏れ晒しの中で

西郷は端坐して沈思黙考、巖の如し

ロダンの「考える人」も及ばず。

口に入るは一飯一菜、さすがの

大男も日に日に痩せたが

一言の不平もなき默然人。

さはれ、彼の心と魂之靈は

国状政状への洞察に

千里の靈眼あるを誰か知らん。

間切横目の役職の土持政照は

西郷の大人格に感動し

好意を傾けて便宜をつくした。

獄舎も新造、食事も改良、因って健康も

もとに復した。

「ありがとごこわす」

西郷は熱き友情に

繰り返し繰り返し感謝した。

四方山の談論に政照は感激し

兄弟の好誼の如き心地となった。

西郷の楽しみは性来の読書

行李三個の書物に読み耽る。

彼に接する子供にも大人にも

何くれとなく有益な話を聞かせた。

人の生活は無欲第一、自愛禁物

敬天愛人は天道人道。

他に仔細これ無しが彼の人生道。

クラークさんのビー・ジェントルマンも

大西郷の「敬天愛人」には及ばない。



政照が飢饉の如き天災には如何せんと
訊ねれば西郷の答えはこうだ

「救民のため平生の

穀類甘蔗の貯蔵が大切でござす」

この言を遵って事実済民ができた。

西郷の島生活一年八か月、

代官の庄政に抗し、島民のため

政状変革を進めてやった。

ゲーテがヨハネ福音書劈頭の

「始めに言あり」を

「元始に行為あり」と改変したが

西郷こそは正にその実践者。

文久三年初夏の頃、生麦事件

即ち薩摩の武士が英国人を斬った事件を

案じて涙もろき西郷は涕涙滴々。

政照も涙ながらに歎いた。

防戦のため財を投じて造船を企てた。

見よ、鹿児島島の武装商船が英艦を撃退した。

因って新造船を報恩丸と命名した。

流罪の身ながら郷土心の深い西郷。

在都薩藩志士の運動に因り

元治元年二月下旬

丸に十字の藩旗の船が

島の伊延港に近づいた。

西郷はこれを見て両眼から涙が溢れた。

赦免状の使者だが、何の赦免ぞや！

大西郷を島流しにした領主こそ

赦免を乞うべきだ！

だが西郷にはいささかの忿怨もない。

「獄裡の仁感謝するに語無し」

とて、親しんだ島民を愛惜して涙した。

弟の慎吾も迎えに来たので、相擁して感涙。

「天下の臥龍」の帰還を待つ

国情は何を西郷に課せんとするや。

その頃徳川幕府は衰勢そのもの

今や日本は天皇統治を迎えるべき時期

明治元年二月、討幕の詔勅下り

西郷隆盛は官軍の大参謀となる。

幕府最後の人物は勝海舟。

芝高輪の薩摩邸で両雄は相会した。

「勝さん、なかなか、大変でござすなあ」

「わからずやが多いので！ 心配でした

だが、あんたが来られるので

安心しました」

「議論はともかく

私が挺身引き受け申す」

江戸城開城にあたり

大江戸を火にせぬことを

西郷はしかと約し、総攻撃中止命令を

海舟の面前で実施した。

人物同志のあざやかな決断決行。

官軍の兵が門前で海舟を取り巻いた。

しかし西郷を見てさつと囲みを解いた。

明治元年晩秋、薩摩軍鹿児島帰還。

彼は愛犬四、五匹を伴れて

狩猟したり、入湯したり。

悠々自適、自然を愛し、読書を楽しむ。

その日当山温泉生活を中止した。

藩主忠義が薩摩の全政を彼に委ねた。

明治二年六月、彼は維新第一の元勳として

石や位階の賞典に与かるどころ

そんなことは戦死者に申し訳なきこと也と

一切辞退する空漠大気の如き西郷。

大器何をか要せん、これが西郷なのだ。

しかし国家が彼を要するを如何せん

明治五年、彼は陸軍元帥

このえととく ようりつ
近衛都督に擁立された。

明治四、五年頃の参事官の月給五百円

西郷はそんな多額は要らんといって
受給を拒んだ。

家賃三円、下僕の熊吉、犬二匹
生活万端月十五円以上は不要。

ある日大蔵省の渋沢栄一を訪ねた。
渋沢が

「西郷さん、あなたは月給を
ちつとも受けとらないので

係員が大へん困迷していますよ」

「はあ、お金か余っているので

要りません。上に立つ役人は

質素儉約を旨とせにやなあ

上位の者が立派な家に住み贅沢をしたら

維新の大業は大成しないと思ひもす」

渋沢は時の状勢を想つて胸を刺された。

渋沢は彼の忠僕熊吉を呼んで無理に渡した。

西郷は熊吉のもつて来た袋を見て

「どうか、そこへ置いといてくれー」

青年らが困つて西郷におねだりに来た。

大先生は

「そんな棚のもの、いるだけもっていけ」

みんなは思い思いに要るだけ取り出して

「先生、ありがとうございます」

と低頭！

ああ千歳に一人とて此の如き人物ありや！

「生命もいらさず、名もいらさず

官位も金も要らぬ人は

始末に困るものじゃ。

この仕末に困る人ならでは

艱難を共にして国家の大業は

成し得られぬなり」

の告白を言以上に身証したのは



言つまでもなく大西郷であった。
法華經の行者曰蓮は

「我は日本国の柱なり」
と宣告したが

大西郷こそ明治維新時の大黒柱。
西郷精神こそ不滅の靈柱だ。

昨今の日本の政治家たちよ、御身らは
上野の大西郷銅像を空しく立たしむるや。

さて維新の大改革として必然なすべきは
はいはんちけん 廃藩置県であつた。

西郷、大山、大久保、山形、井上

木戸の面々が明治四年七月談議を開いた。

諸々の藩勢の根は深い。

おいそれと廃藩の気は起き難い。

「ただ唯断行するのみだと思ひ申す。

何か不都合が起つたら

みんな私が御引受け申す」

こんな断行のできるのは西郷の他に無い。

彼は何ごとに限らず難局には棄身だ。

明治天皇西郷を宮中に召して問い給つた。

「おそ畏れながら、西郷の在ます限り

御安心いただきますように！」

四年七月十四日、廃藩置県の大令公布。

薩摩では愚公久光が、予告なしとて不機嫌。

西郷は既に国家の大西郷である

薩摩からは文字通り

身を投じ出でた出身者だ。

韓国との国交が思わしくなくままに

西郷は単身出向いて

談判をしたいと申出でた。

愛に基づく理性を以て談合するのが
最善と確心していた。

断じて征韓の如きを考えてはいない。



世に西郷の征韓論など称^いうは大誤解。
敬天愛人は敬天善隣でもある。

明治六年八月

閣議は西郷を遣韓大使と決した。

大久保、木戸、岩倉が相次いで欧米から
帰国、彼らは内政充実を主張して

西郷の遣韓に反対。

高官どもの会議の結果遂に遣韓中止となった。

明治六年十月二十二日の閣議に於て

西郷は遂に退席、二十四日に辞表呈出。

西郷は議席を棄て行方不明者となった。

数日後、黒田清隆が居所を発見。

「迷惑をかけてすまんなあ」

駿河の徳川氏と庄内の酒井氏に後を頼む

と伝言を託した。

かくて西郷は政界からはっきり去った。

鹿児島に帰ったのは明治六年十一月

武村を住居とし、百姓になった

時に四七歳。馬に桶を荷^{にな}わせて

肥料をもらって歩いた。

家には長男寅太郎（七歳）

次男午次郎（三歳）

生れたばかりの三男西三の三人兄弟。

近衛隊の兵士や官吏が西郷を慕って従行。

西郷は今こそ人材養成と想い立ち

私学校を城山の麓に建てた。

構成は銃隊学校と砲隊学校より成る。

篠原国幹が前者の、村田新八が後者の監督

英人コックス、蘭人スケツフルを

講師に任じた。

校訓は簡潔に次の二項のみ。

一、道と同じうし義協^{かな}つを以て暗^{あん}に集合せり

故に此理^{この}を益^{ますます}研究して、道義に於ては

一身を顧みず、必ず踏行つべき事。

一、王を尊び民を憫むは学問の本旨。

然らば此理を極め、人民の義務にのぞみては

一向難に当り、一回の義を立つべき事。

他に開墾社を農村のために作り

昼は耕作、夜は勉強。

出でては農事に精励することを青年に求め

入りては読書に専念することを勧めた。

市内各町に分教場を設け、百二十四の

各郷に分教場を設けた。その他に

幼年学校（後の陸軍幼年学校の母体）を

設置し、鍛錬第一を校是となした。

あらゆる教育機関の根本精神は

校規を内面から捉えて

自主的に欣然と果すこと。

即ち、労を愛し、書を愛し

同僚を愛する人物となること。

情愛深き大西郷のおのずからなる

影響は推して知るべしである。

学風は千里を遠しとせず

親しき友人に知れ、東方の雄勝海舟は

東京から二人の青年を派遣した。

庄内（山形）からも

少なからざる学生が来た。

大校長の愛は、一例をあげれば学生どもの

鰻の代金未払にまで無言の中に。

明治七年十一月

武村の西郷を訪ねたある男

それは月照上人のお伴の重助だった。

西郷は忘れもせぬ月照とその十七回忌。

「よつこそ来てくじやった

ありがとつごわすー！」

西郷はもつ涙、感慨無量。



重助も涕涙滂沱。
（ているいぼうだ）

「主人に一目でも

念願どりのこの世を！

あなた様の陸軍大将の御姿も」

「何をいいやっか。

私は御覧の通りの百姓じゃ

生きのびているのが

恥しい位に思つとる」

月照が天界から照覧し加護してくれたのだ
西郷の胸中には感謝の涙が湧いていた。

翌十六日の命日に、二人は月照の墓詣。
（もうで）

丁寧な法要をなし

墓前で西郷は声を出して泣いた。

南林寺の墓には命日毎に墓参をしている。

重助を案内して、入水した浜辺を歩いた。
（しゅすい）

重助の所望により、折よくも二三日前に

この日を憶つて作つた詩を書いてやった。
（おも）

月照和尚忌賦

約して淵に投ず後先無し
（ふち）

豈図らんや波上再生の縁
（あにはか）

頭を廻らせば十有余年の夢
（こゝろへ）

空しく幽明を隔てて墓前に哭す
（むな）

武村 吉

重助これを拝読して涙とまらさず。

武村吉ごと西郷の家を辞したが
（たけむらぎち）

振り返り振り返り、眼も霞んで夢か現か
（かす）

西郷も

「達者でな、達者でな！」

と眼をつるませせて。

これが今生の生きわかれとなるとは！

「月照和尚忌賦」は重助の家宝となった。

隆盛の弟従道も將軍だが
（つぐみち）

フランスで従軍もしたフランス軍服で

兄に眼見えての閑談はまことに楽し
彼はまた台湾の軍制にもあずかった。
性格は兄に似て大度にして思い遣り深き人。
まことに美德の兄弟である。面談三日
ではさよならが生別となったとは。

当時十分の子弟は百姓を下僕視した。
ある十分の少年が途中で鼻緒が切れた。

「うら、そこん百姓

こいつを直せっくれんか」

「はあ、わかりました」

手拭いを裂き、鼻緒をたて直して

「こいで、よっこわすか」

「うん、よか。おいが足にはかせろー」

少年は礼も言わずに去った。

後になって、あの百姓が西郷先生と知り、
ぶっ倒れんばかりの驚愕でお詫びに赴く。

「先生、大変な失礼

赦してくいやったもんせ」

「いやいや、そげんこといわんでもよか」

百姓になりきった気持の先生は微笑だけ。

また一方、私学校の青年教育は

いぎ鎌倉というとき生命を投げ出して

国家のため尽さんためである。

その自覚なき青年らは西郷に大喝された。

青年らの中には後の日露戦争時の

將軍山本、上村の如きもいた。

人材を知る西郷は、その一人一人が

無駄死にをせぬように遠謀深慮した。

私情小成に非ず、大愛大義の心情であった。

明治元年の戊辰の役に際し

庄内藩（今の山形県）は官軍に抗したが

その過誤を悟り、謝罪降伏した。

時の官軍参謀黒田清隆は

庄内藩の誠意を諒承

寛大なる処置をしたので

爾来庄内藩は処置の大本たる

西郷隆盛の大度に感激して

薩摩に対して親交を誓った。

西郷は武人の誓を無条件に受諾した。

昨日の敵は今日の友

これが黒白顕然たる人格者同士の

信頼関係というものだ。

庄内の人心の気風は春風の如くなった。

明治三年十一月、庄内藩主酒井忠篤

藩士七十余名を引き具して

鹿兒島に赴き西郷の指導に与かった。

西郷は天下の師だ。

藩士菅実秀も上京して西郷に面接。

「生命も要らず、名誉も要らず

官位も爵禄も要らぬ者に非ずんば

共に廟堂に立ちて

天下の大政を論じ能はず」

菅はこの言を聴いて

西郷先生こそその人なりと感じ入り

全身が電光に貫かれる想いであった。

この世紀末の政界に

斯かる人物何処にありや。

某日、深川の別邸に庄内の重臣らを招いた。

その席上、次の詩を書いて与えた。

「幾びか辛酸を歴て 志 始めて堅し

丈夫玉碎するも軫全を愧つ

一家の遺事人知るや否や

児孫の為に美田を買はず」

明治五年四月



庄内の忠篤は清隆の勧めにより
獨逸留学を志す。

彼、西郷を訪ねて教を乞った。

西郷の訣別の言の主旨はこうだ。

「黒白を明かにせよ

白と断ぜば決然と行へ。

道にこの他仔細なし。

風聞によればドイツ人ビスマルクは

豪傑にして技能なき人。

外遊に幸あれ」

「技能なき人」とは「君子器ならず」の意

君子、即ち有徳の人は器ではなく

徳化力ありの意。

即ちビスマルクは大人物だということだ。

因みに言わん、秀吉も家康も

大物ではあるが大人物ではない。

大人物は果して幾人ありや。

古くは空海、法然

近くは象山、松陰、西郷隆盛

大山、乃木、東郷であろう。

西郷の住居は粗末そのもの、門なしだ。

庭池は鹿児島湾、庭山は桜島

大自然の他に何が要るかというものだ。

室の常客はワシントン、ナポレオン

ペートル大帝、海将ネルソンの四人だ。

彼らは壁から話しかけているのだ。

庄内の昔と西郷の交友は深い

菅への詩に次の如きがある

「相逢つて夢の如く又雲の如し

飛び去り飛び来り悲しみ且つ欣ぶ

一諾半銭李下に恥づ

昼情夜思君を忘れず」



菅は弟子どもと『大西郷遺訓』を出版
そは明治二十三年一月
永く遺る名訓である。

「節義廉恥を失つて

国を維持するの道決して有らず」

「何程制度方法を論ずる共

其人に非ざれば行はれ難し。

人有つて後方法の行はるるものなれば

人は第一の宝にして

己れ其人に成るの心懸け肝要なり」

「道は天地自然のものなるゆえ

講学の道は敬天愛人を目的とし

身を修するに克己を以て終始せよ」

ここに揚げた最後の句は千古の名言！

西郷は天を相手として生きた人

天意第一、まことの宗教心である

天道こそまことの人道

万人は宗教人たるべしと謂うに同じ。

何宗何派などを問題にするは

眞の宗教に非ずだ。

日々宗教を生きることが宗教の本義だ。

西郷の私学校の精神を誤解乃至猜疑して

多くの密偵がうろつき出した。

警視庁の探索ちがいは言語道断。

西郷を始め幹部暗殺の謀略は何ごとぞ！

火薬庫を爆破し

騒乱に乗じてこれを果さんとする！

騒然たる情勢に弟子どもは奮然蹶起。

西郷は、天知る、隠忍自重を促した。

刺客が西郷を外見わからぬが如く訪ねた。

そんなことの洞察できぬ西郷か。

何をか恐れん、彼は悠然として談笑

彼の偉大さに圧倒されて刺客は退散。



大西郷の魂たましひ之靈たましひの次元ちがが異ちがう
彼の身た辺たに漂たう靈風たましひを犯たますものなし。

明治十年一月二十九日夜、草牟田の隆盛院の
火薬庫が襲撃され、弾薬が奪われた。

三十一日夜半には

一千余人が集成館の鉄砲製造所

坂元上かみのぼら之原の火薬庫を襲い

兵器弾薬を奪い

赤龍丸に積んで逃げ去った。

西郷さんが犬を伴れて

狩猟中の出来ごとだった

事の次第を聞いて

西郷いよいよ時局の重大を知った。

明治十年二月十四日、大降雪、何の前兆か。

十五、十六日薩摩の健兒らが出発！

十七日には本隊が出陣。何処に向ってか。

熊本鎮台ちんたいが目指す相手だ。

何故にかくも薩摩を圧迫するや

西郷は談判を堂々とする魂胆だ。

熊本の背後は無論政府だ。

政府は西郷軍と知って逆賊ぎやくぞくと称した。

有栖川宮ありすがわのみやが征討総督せいとうそうとくに任せられた。

熊本城司令官たにかんじょうは谷干城

いよいよ熊本城総攻撃のやむなきに至った。

だが西郷自らはいざこに在りやだ。

小倉の連隊長のぎまれのすけ乃木希典が

政府軍の援軍として熊本城に向ったので

植木付近で激戦となる。

官軍は兵力も武器も優っているから

薩軍は苦戦。

退却のやむなきに至り

遂に長井村まで後退。

全滅に垂んとしたが可愛獄突破。

西郷は陸軍大将の制服も重要書類も全部灰塵に帰せしめた。

天を仰げば月華皎々、西郷の心境だ。彼に何の怨恨あらんや

政府は大人物西郷を

全然理解し得ぬ馬鹿者揃い。

位階勲等を誇るお偉方が何だ！

残兵五百、九月一日、鹿児島に

西郷の勇姿を見て市民は欣んだが

何ぞ知らん

西郷の帰り往くところは天界である。

西郷は将兵と共に城山に立て籠った。

その数三百七十余名と伝えられる。

もとより「生命も要らぬ」彼だが

部下の生命を惜しみ、その家族を想い

「若い人を多く死なせて、すみもはんと

と繰り返しくりかえし口ずさんで涙した。

なつかしの桜島！

その噴煙は今や山の怒りだ。

官軍の放火は郷土をも焼く、何たることか。

九月二四日午前三時、官軍の総攻撃。

西郷は退かぬ。島津邸の門前で

流弾が西郷に当たった。西郷は最期を知った。

彼は明治天皇を想い、東天を拝し

冥目ののち

「晋介どん、もつこごでよかじゃろう」

「では御免」

彼は介錯をした。

波瀾万丈、五十年の生涯は

ここに幕を閉じた、深く愛した城山で。

「西郷さん」と呼ぶが如き桜島に

なつかしの眼差で

今生の別れを告げながら。

大西郷の眞面目は時、かこれを現じ
政府の大錯誤は同じ時、かこれを審いた。
「敬天愛人」は大西郷の別名である。
「大人物」とは西郷の別称である。

今口堂。

（一九九二年十一月二十三日 摺筆）

●キリストという超大人物

私は、「大人物」というのは西郷さんの他にないと思つています。古いところでは、空海と法然です。

ところで、マタイ伝5章43節からのキリストの言、

「43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等きけり。44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、収税人も然するにあらずや。47 兄弟にのみ挨拶するとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。48 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」（マタイ5・43～48）

「正邪善悪の区別なし、誰でも本当に愛せよ」

と。これは本当に聖霊の愛が来なければできないことです。ね、キリストの水を割らざるこ
ういう言葉には。西郷さんは正にそのような人でした。福音を知っているかと思うような
人です。

それから、有名なヨハネ書簡のところも読みましょうか。

「7 愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おおよそ愛ある者は、
神より生まれ、神を知るなり。8 愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。
9 神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える独子を世に遣し、我等をし
て彼によりて生命を得しめ給うによる。10 愛というは、我ら神を愛せしにあ
らず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥めの供物となし
給いし是なり。」

生命を棄てた愛です。

11 愛する者よ、斯のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがい相
愛すべし。

棄身の愛です。



12 未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。13 神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。」（ヨハネ一4:7～13）

「神またキリストが」です。

今の日本の教育界もそうだし、政界があんなざまなものだから、私は憤激にたえないから、西郷さんをこうやって、皆さんと一緒に学んだ。「大人物」といえば、もう西郷さんの他に私は考えられない。そういう意味でこの詩を自ずから私は書いた。

単に召団のためばかりでなくて、私は本当に日本のために大いにこれから叫ぶつもりですから。

秀吉や家康は大物であっても、大人物ではない。大人物というのは滅多にいない。西郷さん、空海、法然、そこらは本当の大人物だ。

我々は小さな人間ですけれども、しかし、大人物の質は持つていなければダメです。また、必ず持ちます。キリストという超大人物が我々の体の中に御霊をもつて来てくださるからです。ですから、妙な卑下をすることはない。私たちの福音の存在は非常な使命をもつていますので、皆さん、大いに棄身の態勢でもつて進んでいきましょう。数なんかどうでもいい。問題は質です。とにかく、一人ひとり本ものになつて進んでいくことです。

